

## 愛を叫ぶ『新エロイーズ』

— 永久にこだまする十八世紀愛の書簡 —

ジュリー・ブロック

### 概要

これから見ていく『新エロイーズ』は、今日となつては、叙情的過ぎるとして、いささか時代遅れになつてしまい、あまり読まれなくなつてしまったことは否めません。しかし、フランスにおける恋愛観の歴史を辿る上で見逃せないだけでなく、フランス人、ともすると全ての現代人の心の底流に潜んでいるであろう、「純粋な恋愛」や「情熱的感情」への思慕、或いは人間の中にある「自然的なものとしての道徳」への憧憬を呼び覚ますものが凝縮されている作品として、むしろ現代人にとっては新鮮に捉えることが可能かもしれません。いずれにせよ、当時の読者にとつて、それまでにない新鮮な恋愛観を提供した作品であつたことは事実であり、フランス社会における男女の道についての新しい地平を切り開いた作品であつたとも言えます。

本論ではまず、この作品の書かれた時代背景および作者ルソーの生涯について概観し、次にその着想と構成について簡単に述べます。その後、物語のあらすじを紹介していきますが、必要以上と思われ

る程多くの引用を用いています。それは、今言つたような、現代人にとつては大げさと思われる程の叙情的文体が織り成す登場人物の心情の変化や、時代の雰囲気をもそのままに伝えるためであります。最後にこれらを踏まえ、『新エロイーズ』成功の理由に迫りたいと思います。

### 1. はじめに

#### 時代背景

17世紀の恋愛観はクレレーヴの奥方に代表されるように、「名誉」が中心でした。ルイ14世<sup>1</sup>の時代が終わり、その孫にあたる若きルイ15世<sup>2</sup>の時代が訪れると、社会風俗は開放的になり、アベ・プレヴォ<sup>3</sup>の『マノン・レスコー』<sup>4</sup>のような作品が生れます。自由奔放な人々が増えた時代をマノンが代表していましたが、彼女を一途に愛し続けるデ・グリユーのような人物は、もはや小説の中にしか描か

れないような現実離れした人物となり、憧れの対象として輝いていました。また、そのような苦悩を伴う情熱的な恋愛に人々は郷愁を感じるのです。登場人物は、凡庸ではない、感覚的人間の象徴として魅力的に映ったのです。

15世紀から17世紀前半にかけての大航海時代は、未知の大陸文化における様々なものをヨーロッパ文化に伝えました。例えば中国の陶磁器やインドから来たスパイス、アメリカから来たじゃがいもなどは、18世紀を中心に広く流行しました。異国についての知識も豊富になり、例えばデイドロの編纂した『百科事典』の中には「ジパング」の名で、日本についての数々の記述が見られます。そのため、哲学の分野においても、「未開礼参思想」なるものが表れてきます。航海記に書かれた未開人の生活様式や習慣、考え方、性格などが、知識人に大きな刺激を与え、当時の社会と照らし合わせ、思想的転回を促す要因となったのです。この影響で、文学の中にも未開の地を舞台にしたものや、「未開人」の登場人物が描かれるようになってのですが、彼らには必ず「善良な」という形容詞が伴うのです。また、小説家、特に哲学者の吐く「善良な未開人」という言葉の裏側には、当時の社会への風刺が含まれることも度々ありました。マリー・アントワネットが農民的生活を真似たことで知られるように、形式的に、自然的なものを良しとする傾向や、今述べたような、異国情緒への指向の高まりは、「自然に還る」という大きな運動に繋がる徴候だったのです。身の回りの現実感から逃避しようとする時代の欲求が、未開の地にまだ存在していた「自然」に帰着したのは、不思議なことではありません。このように、自然を省みること、文明社会を問い直そうという考えは、あらゆる分野におい

て旧慣を改め、新秩序を打ち立てようとした18世紀、「啓蒙の時代」を担う、重要な思想の一つだったのです。

この啓蒙の時代の思想については、デイドロ、ヴォルテール、ルソーの名を挙げずして語ることはできません。3人とも教育、宗教、政治、科学、芸術などあらゆる分野について論じましたが、中でも本論の中心となるルソーは重要な人物です。今でも、現代的な意味での「民主主義」「市民」などといった概念を深く理解するために、彼の書いた『社会契約論』に遡らなければならないことが、この思想家の重要性を示しています。当時において彼の思想が物議を醸し出していたのはもちろんのことですが、それを知識人の間で行われる議論という枠を超えて、広く一般市民にまで及ぼすことになった作品として『新エロイズ』は特徴付けられます。

これは彼が書いた唯一の小説であり、初版の1761年以後の40年間の内、実に70回もの改訂出版がされました。後にも先にもこれ程の成功を見た作品はないと言っても過言ではありません。少なくともおよそ半世紀に渡って人々に与えた影響は量り知れず、この作品を読んでそれまでの信条や恋愛観を改める者までいた程です。文学に於いて影響を受けた作品も数知れず、ナポレオンやゲーテなど後の世紀の著名人も皆がこの作品を読んでいたと言われています。

ルソーは、思想家或いは哲学者なのか、それとも小説家、芸術家なのか。専門家たちの間でも、彼をどのように位置付けたらいいのか、最近まで議論されてきました。例えば教育の専門家は「エミール」という作品を外すことは出来ませんし、同様に、法哲学においては『社会契約論』、宗教学においては『信仰告白』、社会学におい

ては『人間不平等起源論』<sup>12</sup>、言語学においては『言語起源論』<sup>13</sup>が、それぞれの分野における基礎的文獻として今日でも重視されていることは事実です。また、文学における「自伝」という様式は、ルソー以前にはありませんでした。彼の『告白』<sup>14</sup>、『孤独な散歩者の夢想』<sup>15</sup>を呼ぶジャンルとして「自伝」という言葉が初めて生れたのです。個人の体験を主観的に、かつ何事も包み隠さない客観性を失わないで、ありのままの心情を語ることが、50年前のリチャードソンやアベ・プレヴォーによってなされていましたが、架空の登場人物を通して告白するのではなく、作者自身つまり「私」が語るることによって構築される「自伝」という様式は、ルソーが最初です。自伝に限らず、こうした主観的・叙情的表現の仕方が後に流行するようになります。ロマンティズムという流れを生み出したのです。従って彼は「自伝」の先駆者であると同時に、ロマンティズムの先導者でもあるわけです。

## ルソーの人生

1712年、ジャン・ジャック・ルソーは、スイスのジュネーブに生まれます。父は時計職人であり、母はルソーを生んですぐ他界してしまいました。彼は子供時代には教育を受けておらず、多くを独学で学びました。15歳になると奉公に出されますが、この頃の彼は怠け癖があり、不真面目な行いをしがちでした。ある日、田舎へ出かけて戻ってくると、町に入る門が全て閉ざされており、ひどく叱られるに違いないと悟った彼はそのまま町を飛び出していつてしまいます。彼が16歳の時でした。

その後、放浪生活に入りますが、物乞いをしたり、使用人として働いたりしながら、僅かなお金を稼いでしのいでいました。その中で出会ったバランス夫人に気に入られ、彼女のもとで、20歳のときから過ごすようになり、彼の生活は、華やいだものとなります。プロテスタントであった彼は、彼女の影響でカトリックに改宗し、教会のミサで自作の演奏を行ったり、音楽を教えたりする事で稼ぐようになったので、食事には事欠きませんでした。同時に彼は、自分に足りない教育を補うために、歴史や天文学、物理学、あらゆる分野の学習を、体系的に行いました。ただ、あまり体は強い方ではなかったので、時々田舎で療養生活をすることもありました。ルソーはバランス夫人と永久に過ごすことを夢見ていましたが、別の若者が夫人のもとに仕えるようになってからというもの、彼への嫉妬に駆られるようになります。

それからの2年間リヨンで家庭教師などを経験しますが、また夫入のもとへ帰ったりを繰り返します。しかし、もう以前のような幸福に満ちた生活には戻れませんでした。ようやくパリに落ち着いたのは30歳の時で、それから10年間、彼は名誉、名声を求め続けていました。やがて彼はヴェネチアフランス大使館の秘書の地位を得ましたが、気難しい性格だったため衝突も多く、結局はうまくいかずに解雇させられてしまいます。再びパリに戻ったときには、貧しい生活が待っていました。兼ねてからの友人デイドロらと共に、『百科全書』の編纂に参加します。このとき、演劇や舞踏などの、いくつかの戯曲や作曲を手掛けますが、望みどおりの評価はなかなか受ける事ができませんでした。貧しいながらも、必死に生活していた彼は、何とかサロンに通いつめました。いざ社交場に出ると怖じ

気付き、気後れしてしまうのでした。何人かの貴族の女性とつき合うものの、どこかぎこちなく、これもまた上手く行きません。結局、恋仲になれたのは、テレーズ<sup>17</sup>という優しく温厚な若い女性でしたが、知識や教養に欠ける、宿屋の女中という身分でした。彼女との間に5人の子を授かりますが、皆施設で育てられました。当時はパリに生れた子供のうち、3分の1はそのような境遇だったので、これは珍しい事ではありませんでした。貧しさ故、むしろ国に面倒を見てもらった方が食うに困らず、まともな教育が受けさせられると考える節もあつたのです。しかし後の人生で、子を見捨てた事に後悔も見せています。それは『告白』を執筆する動機にも繋がるものです。

いつしか栄光を追い求める事に疲れ、社交界から離れて素朴な生活を望むようになっていたルソーでしたが、皮肉にも彼の名が世に知れ渡ることになるのはこの頃からでした。たとえお金がなくても高い道徳を持ちさえすれば、人は幸せになれるのではないか、という彼の主張が広く受け入れられたのです。彼は新たな境地に立ちますが、飽くまで質素な民族服のような出立ちを捨てず、慎ましさの中に幸福を見出す立場は変えませんでした。一方、『百科全書』の編纂も続けており、仲間にはあの有名なグリム<sup>18</sup>などもいました。ルソー自作の戯曲もようやく日の目を見るようになりますが、このとき既に彼は病床に伏していました。43歳になった彼がこの時執筆していたのは、性善説の立場で、社会の不平等がもたらす人間の悪について指摘した『人間不平等起源論』です。

やがて彼はスイスに戻りますが、情緒不安定となり、孤独に陥ってしまいます。デピネ夫人に、パリの北方にあるラミタージュとい

う場所に招かれますが、ここで書き始められたのが、『新エロイズ』<sup>19</sup>なのです。

## 2. 『新エロイズ』の着想と構造

### ジュリの誕生

1756年に『新エロイズ』を書き始めた時、彼は44歳でしたが、13年後、57歳になったとき、書き始めた当時の事を、こと細かに回想し『告白』という作品の中で綴っています。「生涯の様々な時期の思い出は、私が到達していた地点についての反省を誘った。そして苦しい病気に悩みながら、すでに年齢の傾きかかっている自分を見たが、自分の生涯の終わりが近付いていると思いつつも、私の心が渴望している快樂は、ほとんどなにひとつ満足に味わったことがなく、内にありあまる激しい感情を自由にのばしたこともなく、自分の魂のなかに強く感じていた、あの酔いしれるような肉感を味わうどころか、わずかに触れたこともなく、対象がないままにつねに抑えつけられて、ただ嘆息として発散する以外には、なににもできないのであつた。…これほど燃え上がりやすい官能を持ち、まったく愛に満ちた心を持ちながら、ただの一度もその特定の対象に、愛の焰を燃やす事ができなかったのはどういうことであろうか。」<sup>20</sup>

これは勿論、全く女性との付き合いがなかったことを意味しているわけではありません。ただ、それまでの女性との経験が、自分の理想に描くものとは一致しなかったと言っているのです。「お母さん」

と呼んでいたことから、バランス夫人に対する愛情は穏やかなものであったことが分かります。「…ベッドにいて、よくまだ半分眠っているお母さんに、接吻しに行った。この優しくも純粋な接吻は、その無邪気さそのものから、官能の快楽とは決して結びつかないある魅力をつくり出していた。」<sup>21</sup>

また、長い間日常を共にしたテレーズへの愛でさえ、燃え上がるようなものではありませんでした。「私はあまりにも誠実にテレーズを愛していたので、彼女が与えてくれる以上に激しい感情を、私  
が他の女性に向けるのを見せて、彼女を悲嘆にさらすということはできなかった。」<sup>22</sup>

そうした場合、彼は「空想の国に身を投じ…自分が夢中になるにふさわしい女性を理想の世界の中ではなくみ…たちまちその世界を自分の心にあつた女性で満たした」のです。「これほど時を得た、実り豊かな手段はなかった」という彼は、そういった瞑想を、「一年のうち最も美しい季節の6月に、涼しい森陰で、夜鶯<sup>24</sup>の歌や、小川のせせらぎに合わせて」<sup>25</sup>おこなっていました。現実の人間のことを全く忘れ、完全な被造物としての魅力的な仲間に取り囲まれ、酔いしれながら、小説の着想となる手紙を書きはじめたのです。

「私は自分の心の二つの偶像である恋愛と友情とを、この上なく魅惑的な姿に思い描いた。それを私は、つねにあこがれていた女性のあらゆる魅力で飾って楽しんだ。…私は、似た点もあるが、異なってもいる二つの性格をそれに与えた。二人の顔だちは完璧ではないが、私の好みにあつて、好意と感受性によっていきいきとしている。一方は栗色の髪で、他方は金髪。一方は活発で、他方はしとや

か。一方は懸命で、他方は気が弱い。といつても人を感動させるような弱さなので、美德がそこでは高まって見える。…二人のうち一人には恋人を与え、もう一人はその優しい女友達、いやなにかそれ以上のものとした。…この二人の魅力的なモデルに熱をあげた私は、できるだけ自分をその恋人、その友達に同化させた。ただしそれを愛すべき若い男にし、そのうえ、自分に感じられる得と欠点とを与えたのであった。」<sup>26</sup>このようにして作家の頭の中で三人の登場人物、ジュリ、ジュリの従姉妹クレール、ジュリの恋人となるサン・プルーが生まれました。

小説の舞台設定については次のようです。「私の作中の人物を彼らに相応しい土地に置こうとして、いままでの旅行で見た最も美しい場所を、次々に吟味してみた。…だが私の想像力は、新たに作り出すには疲れていたもので、よりどころとして役に立ち、しかも私が住ませたいと思う人物の实在性についても、錯覚を与えてくれるような、どこか実在の場所を求めていた。」<sup>27</sup>

どうしても湖水が必要だった彼は、結局ジュネーヴにある湖のほとりの一部に場所を定めましたが、そこはずっと前から住みたいと願っていた場所であり、バランス夫人の生まれ故郷でもある場所でした。若き放浪の日々に眼にしていた景色でもあります。

次の章で小説のあらすじを紹介するにあたり、その題名の意味について触れておかなければなりません。主人公の女性「ジュリ」は、「生涯を賭けた愛」を象徴する女性として描かれており、題名の「新エロイズ」とは、まさしく彼女のことを指しています。では、

ジュリが「新しいエロイズ」であるならば、「エロイズ」とは一体誰なのでしょう。実は、エロイズは12世紀に実在した女性です。彼女が「アベラール」という男性との間に交わした書簡はすでに13世紀から知られ、愛の往復書簡集として刊行されていることもあり、古来有名です。なお、ルソーの『新エロイズ』においても、往復書簡という形式が模倣されています。

### 3. あらすじ

#### ジュリの初恋

最初の手紙はサン・プルーからジュリへの告白の手紙です。それは感傷的な内容で、相手に何かを求めるようなものではなく、彼女への想いをひたすらに伝えようという内容です。「貴方の美しさは私の目を眩ませました。でも、美貌に生命を与えるもつと強力な魅力がなければ、私の心を迷わせることはなかったでしょう。あなたのうちにあつて私が愛してやまないのは、いきいきとした感受性と変わる事のないやさしさとの感動的な結びつきなのです。他人のあらゆる不幸に向けられる情け深い哀れみの心、魂が清らかであるからこそ清らかな、あの公正な精神と繊細な趣味なのです。一言で言いますと、容姿の魅力よりもはるかに感情の魅力なのです。」

しかし、サン・プルーはこの手紙を送ったとたん後悔します。「あなたの怒りの重みをもうすでに感じ取り、その最後の結果を待っています。ほかは望めないとしても、これだけはあなたから与

えられてしかるべき恩恵なのです。といますのも、私をやきつくす焔は、罰せられるべきものではあつても、軽蔑されるべきものではないのですから。どうか私を放置なさらないでください。せめてわが運命を左右して下さい。どのような意向をお持ちなのかおっしゃってください。あなたが何を命令されようとも、私はただ服従を知るのみです。永遠に沈黙せよとおっしゃいますか。それなら、無理矢理にでもそうします。あなたの面前から追放されますか。それなら二度と姿を見せぬと誓います。死を命じますか。ああ、それは最大の艱難とはならないでしょう。どんな命令にも同意します。あなたを愛してはいけないという命令のほかは。それさえも、できることなら服従するでしょうが。」このように、想いを寄せる女性からの指示を求め、服従する意志は、騎士道精神から続くものと考えられます。

サン・プルーが遠くへ姿を消すと言い出したとき、はじめてジュリは沈黙を破って、短い返事をよこします。「そんな考えでお行きになつてはなりません。有徳な人なら自分に打ち克つか、それとも黙っている事がおできになるはず、そしてきっとわたしが恐れなければならぬ人におなりでしょう。でもあなたは…あなたはここにいらしてようございます。」彼は答えます。「長いあいだ黙ってきたのです。あなたの冷たさがついに私に言わしめたのです。徳のために自分に打ち克つことはできません。愛する人の軽蔑に耐える事は出来ません。行かねばなりません。」

「いいえ、いけません。」とジュリは答えます。「あのようことを感じていらつしやるご様子、しかもわたしに言っておしまひなつたのですから。あなたが装つてお見せになつた通りの方なら、出

発はなさいません。もつとたくさんなさることがあります。」<sup>32</sup>

この「なさること」は、死をほのめかしています。「明日になれば、あなたはご満足でしょう。あなたがどうおっしゃろうと、いまさら立ち去るまでもないこと、もつと簡単にすませておきましょう。」と、遠くへ立ち去るまでもなく、明日にでも死んでしまおうと告げます。<sup>34</sup>

ジュリは「分からない方ねーあたしの命がだいじとお思いなら、ご自身の命を粗略になさいますな。」<sup>35</sup>と言って短い返信をした次の日に、はじめて長い手紙でサン・プルーへの告白を綴ります。「とても隠しきれなかった致命的なこの秘密！死ぬまでけつして洩さないと、何度誓ったことでしょうか！あなたの命が危ない、そう思うとどうしようもなく打ち明けてしまうのです。秘密があたしから洩れていく、そうして名誉が失われるのです。…名誉を失って生き延びるのは死ぬ以上のこと、これほどむごい死がありませんか。」<sup>36</sup>

ここまででわかることは、いかに互いが死ぬ程愛し合っていること、とも、二人ともが何にも増して「名誉」を重んじていること<sup>37</sup>。彼女の希望は彼が傍にいてくれることですが、それ以上に求めているのは自分に対する「尊敬」なのです。「あなたは有徳の人になられるか、それとも軽蔑されるかです。あたしは尊重して頂けるか、それとも愛の病が癒えるかです。これが、死の希望に先立ってあたしに残されているただ一つの希望なのです。」<sup>38</sup>

サン・プルーは答えます。「天使達よ、私の魂は苦悩するためにあつた…あなたという方は今後ほくにとって最高に魅力的なしかしまた、この上なく神聖な、かつて人間には託された事のない名誉ある預かりものとなりました。ほくの愛も、愛するその人も、変わる

事のない清らかさを保ち続けるでしょう。…だからあなたは、恋人と一緒にいても、お父上のそばにるように間違いなく安全です。」<sup>39</sup>

互いに敬い合い、清らかな関係を築いてきた二人ですが、その距離はかえって想いを募らせたため、あるときジュリのいたずら心に火をつけてしまいました。すてきな隠れ場のような木立をみつけたと言って、サン・プルーを誘い出し、いとこのクレールと一緒にそこで彼を待つ場面で、あの有名な事件が起こります。

「木立に入ると、おどろいたことに、いとこの君がそばによってきて、冗談めかしてキスしてちょうだいなおっしゃる。なんの秘密とかわからないまま、ほくは愛らしい友に接吻しました。感じのいい、ぴったりとした魅力のある方ですけれど、このときほど感覚が心情に支配されている事を悟ったことはありません。が、その一瞬あと、ほくはどうなったことか、ほくが感じたとき…手が震えます…甘美な震え…薔薇の口が…ジュリのが…ほくの重なり、押し付けられた、そして僕の体はあなたの腕にぎゅっと抱き締められました。そうです、稲妻といえども、あの一瞬ほくを燃え立たせた火のようには激しくも速くもありません。体のあらゆる部分があつた甘美な感触に集中しました。ほくたちの燃える唇からため息とともに火が飛び散り、僕の心臓が逸楽の重みにまさに死なんとした…そのとき、突然、あなたが蒼ざめ、美しい眼を閉じいとこの君によりかかり、気を失って倒れるのを眼にしたのです。そこで不安が快楽を消し去った。僕の幸福は束の間の閃光でした。」<sup>40</sup>

彼はジュリの口づけの印象を次のように語っています。「あの致命的な瞬間からほくに何が生じたのかよくわかりません。ほくが受

けた感じは深く、もう消える事はありえない。愛情のしるしだったのでか……恐ろしい責苦です……。いけません、接吻は控えて欲しい、ぼくには耐えられません……きつすぎます、浸透し過ぎます。骨の髄までつらぬき、焼き尽くします。……ぼくを狂乱せしめるでしょう。<sup>41</sup>」

この出来事を境に錯乱してしまった彼は冷静さを取り戻すため、旅に出ます。ジュリの父は、娘に貴族以外の者との結婚を許していません。なかつたにもかかわらず、彼女は旅から帰ってきた彼と肉体関係を結んでしまいます。

罪悪感にさいなまれた彼女はすぐクレールに胸の内を明けています。「世界中があたしの過ちを責めているのではないだろうか。あたしの恥辱はあらゆるものの上に記されていないだろうか。(中略) 永久に逃れ去るがいい、残酷な人よ！彼に憐れみの情けがのこっているならば、その心を打つがいい。二度とあたしの前に姿を見せてあたしの苦悩をいやますことのないように。あたしの涙を見詰める残忍な楽しみを捨てて欲しい。ああ、あたし何を言っているのかしら。あの人に罪はないのです。罪があるのはあたしだけ。あたしの不幸はみんなあたしがつくったもの。自分のほかに人を責めることはなにもないのです。」<sup>42</sup>

ジュリにはいつも傍にいたクレールという、よき相談相手がいましたが、サン・ブルーにとっては友人のエドワード・ボムストーン卿がそれにあたります。また、ジュリの両親であるデタンジュ夫妻も登場しますが、いずれにせよ、彼ら自身あるいは登場人物同士の手

紙の中で登場するという形は変わりません。例えば、エドワードが仲介役として、ジュリの父に考えを改めるよう必死に説得する様子も、それを耳にしたクレールがジュリに宛てた手紙の中で語られているのです。<sup>43</sup>

ところが、父は上流階級とは縁遠いサン・ブルーを認めず、全く聞く耳を持ちません。そのため、スイスから離れなければならなくなったサン・ブルーは、パリへ行きますが、この間もジュリとの手紙の交換は続きます。ある日ジュリの母は、彼女に届いた手紙を見つけてしまいます。「なにもかもおしまい！全部わかってしまいました！隠しておいた場所にお手紙が見つからないの。(中略) 見つけたのは母しかありません。もし父が眼にしたら、あたしの命も終わりです！」<sup>44</sup>このようにして新エロイーズの第1部、第2部は幕を下ろします。

第2部の終わりでジュリとの結婚が叶わず、パリに移っていたサン・ブルーは、その後エドワードの招きでイギリスへ行きます。そこでのジュリとの駆け落ちを望んでいた彼は、何ヶ月も彼女を待ちますが、この願いも叶わず、それどころかジュリは父親の薦めた別の男性と結婚することになってしまふのです。絶望したサン・ブルーが、心の癒しを求めて世界一周の旅に出る場面で第3部は終わります。

## ジュリの結婚

結婚式の場面におけるジュリの心情にも目まぐるしく苦悩する様



子が伺えます。実は彼女は、教会に入る直前でさえ、まだサン・ブルーのことで頭が一杯だったのです。「あなたから、わたし自身から、わたしを永久に取り上げることになるその日は、わたしには生涯の最後の日のように思えました。私は自分の埋葬の準備を見ても、わたしの結婚の準備ほどには恐怖を感じなかったでしょう。運命の時が近づくとつれて、自分の心から最初の愛情を抜き去ることがますますできないのでした。ついに私は無益な戦いに倦み疲れました。これから別の人に永遠の貞節を誓おうというそのときに、私の心はまだあなたに永遠の愛を誓っていたのでして、わたしはまるでそれが捧げられる聖祭をけがす不浄の生け贄のようにして、聖堂に連れてゆかれたのでした。」<sup>45</sup>教会の厳かな雰囲気や、自分を見守る周囲の眼差しの中でジュリは恐怖におののき身震いします。

しかし、この聖なる礼拝式の荘厳さは、突如としてジュリの内面に変革を与えました。感情の無秩序を改め、義務と人間本性の掟に従って感情を立て直そうとしたものは、すべてを見通す神の目です。自分のサン・ブルーへの隠された想いと、自分が結婚の際に口にする誓いを見比べている神の前では「偽りの誓約」をするわけにはいかない、そう思ったとき、目をうるませて彼女を見つめるある夫妻の姿が彼女を捕らえます。義務と誠意に満ちた夫婦の堅固な幸福を感じ、彼女は二人を見習って自分も知恵と理性によって導かれる、清らかな幸福を得ようという希望を甦らせたのです。

そのような心持ちで、ジュリは神への祈りを捧げます。内容は次の通りです。「わたくしはあなたの欲したまう、あなたのみがその根源であられる善を欲します。：わたくしにお与えくださった夫を愛したく思います。忠実でありたいと思います。：わたくしは貞潔

でありたいと思います。：わたくしの心をあなたの守護のもとに、わたくしの願望をあなたの御手にゆだねます。：そして一時の迷いがわたしの全生涯にわたる選択に勝利しますことをもはやお許しになりませぬように」<sup>46</sup>。

神の力を借りて勇気を得て、彼女は夫への完全な服従と貞節を約束します。「私の口と心はそれを約束しました。わたしは死ぬまでそれを守ります。」とジュリは結婚式を振り返り、サン・ブルーへの手紙の中で断言しています。実際、彼女は誓い通り、死ぬまで家族の幸福を築き、守り通しました。

## 再会

4年間に渡る旅を終えて彼が戻ってくる頃、ジュリは、夫に彼の存在について告白していました。彼女がそれほどに愛した男性がいることを知ったヴォルマルは、サン・ブルーへの手紙を書いています。「この上なく賢明な、この上なく美しい女性が幸福な夫に胸のうちを打ち明けました。その夫はかような女性から愛されたほどの立派なお人柄を思い、あなたに家の門を開きます。」

ジュリも追伸で、「いらしてくださいな、あなた。：お断りになって私を悲しませるような、そんなことどうかなさいませぬように」と添えています。敬意と信頼によって厚く歓迎されたサン・ブルーは、夫婦が住んでいるクラランスに来て、近くに住むことができるようになります。<sup>47</sup>

ようやくサン・ブルーがジュリとの再開を果たした場面で、夫の

ヴォルマール氏が席を外している間、しばし二人きりの会話が続き  
ます。夫が部屋に戻ってきたとき、サン・ブルーはジュリの態度に  
驚きました。「彼女は夫の面前でまさしくその人がいないかのよう  
に話をつづけるのです。」<sup>48</sup> 彼が愕然としているのを知り、ヴォルマ  
ールは思わず微笑しながらも彼に言います。「あなたはこの家に行  
き渡っている率直さの一つの見本をごらんになりました。…これが  
私のあなたにお願いしなければならぬ、お教えしなければならぬ  
ただ一つのことです。悪徳への第一歩は、罪のない行為になにか  
隠し立てをすることです。…それが一つあれば他のすべての代わり  
となりうる掟があります。それは、みんなに見られたくない、聞か  
れたくないことは、なに一つしてはならない、言ってはならない、  
という掟です。」<sup>49</sup>

ジュリにとってヴォルマールとの結婚は幸福なものです。「こん  
なにたくさん幸福になるべき理由があつて、それでわたしが幸福で  
ないとお考えになるはずがありません。」<sup>50</sup>

しかし、二人の幸福の中にあるのは、光輝くものばかりではあり  
ません。ジュリの胸の内には、拭いきれないある種の後ろめたさ  
が  
あり続けているのです。その要因としては、母が亡くなったのは、  
サン・ブルーと交換していた手紙を見つけてしまったすぐ後だった  
から、その心痛のせいだったのではないかという疑念があります。  
さらに、サン・ブルーの子供を流産してしまったことや、まじめ過  
ぎる夫との平凡な生活の中でどこか満たされない感覚などが影を落  
としていると考えられるでしょう。

ジュリは何度もサン・ブルーへの手紙の中で、夫に告白しなけれ

ばならないことがあると書いていますが、その「秘事」というのが、  
実はその最もたる要因であることが、小説の終盤を見れば分かりま  
す。彼女は湖に落ちた我が子を助けるために、捨て身で湖水に飛び  
込んだことが災いして、身を患ってしまいます。死の床に伏しなが  
ら、サン・ブルーに宛てた最後の手紙の中で、彼女は「あなたと別  
れるのではありません、あなたを待つのです」と言います。最後の  
言葉は次の通りです。「徳は地上ではあたしたちを隔てましたが、  
永遠の住みかではあたしたちを結びつけてくれました。あたしは  
この甘美な期待を抱いて死ぬのです。あたしの命と引きかえに、罪  
にならずにいつまでもあなたを愛する権利を、またもう一度あなた  
を愛しますと言う権利を手にする喜びにみちて。」<sup>51</sup>

ジュリが最後までサン・ブルーへの愛を貫いていたことは明白で  
す。同時に結婚の幸福の中に落ちていた影が、とうとう夫に告白で  
きなかつた秘事によるものであつたことが明かになりました。それ  
にもかかわらず、ジュリはサン・ブルーへの正直な気持ちを歪める  
ことはしませんでした。

#### 4. 『新エロイーズ』を読み解く

##### 卓越した自然描写

フランス文学において「ツバメ」が描かれることはそれまでには  
なかつたと、当時の評論家サント・ブーヴがいます。<sup>52</sup> もし探せば  
一羽か二羽見つかるかもしれませんが、初めてルソーの作品にツバ

メが描かれたというのはおそらく間違いありません。また、現代でも多くの評論家が、彼の自然の描写について指摘し、その緑のニュアンスの豊かさに感嘆しています。日本人にとっては信じがたいかもしれませんが、ルソー程に自然を生き生きと描写した作家は、フランス文学においては初めてだったのです。

何故彼にそのような描写が可能であったのか考えると、彼の若い時の長い放浪生活や、文壇で成功した後でさえ質素な自然における生活を選んだことなどが思い出されます。彼が表現した自然は、彼自身が目で見、肌で感じた自然だったのです。それだけではなく、繊細な心を持つ彼は、目の前にある自然を描写しながら、そこに自分の心情を映し出していたのです。彼の小説を読めば、そこに表れているのが彼の目になっている景色なのか、心の内なる景色なのか、おそらくはいずれとも取れる表現がなされていることに気付くでしょう。読者は、自然と感情が表裏一体をなす世界に引き込まれるのです。

従って、作者が自ら自然の中に身をおき、自然と一体化したような心持ちにおいて生みだされた小説の登場人物たちの内面にも、まるで自然の風景が映し出されたかのような魅力が宿っており、それはあらずじを御覧いただいた通りです。このことが、ルソーの小説を成功に導いた一つの要因であると言えるでしょう。

## 登場人物の文学的由来

——エロイズ／クレヴの奥方／マノン・レスコー

先に述べた通り、「エロイズ」とは実在の人物でした。運命に

よって引き裂かれ、目の前にある愛の対象を失ってしまったエロイズとアベラールは、二度と会うことができなかったにも関わらず、互いを胸の中に抱き、愛し続けたのです。パリ20区、ペール・ラシエーズの墓地に眠る二人は、今もなお、この物語を我々に語り続けているかのようです。

そうした意味で、フランス人にとって「エロイズ」の物語はむしろ、同じく中世に生れた「トリスタンとイゾルテ」の伝説よりも現実感があり、「離れていても愛し合うことが可能なのだ」ということを象徴する同じ伝説としては、より感情移入しやすいといえるでしょう。従って、フランス人なら、『新エロイズ』という題名を聞いただけで、愛の物語を連想することができ、それが主人公の女性「ジュリ」を指していることがすぐ分かるのです。

ただし、ルソーがこの小説の題名の頭に「新」を付けなければならなかったことは、単に、エロイズの伝説とジュリの物語との間に5世紀が経ったことを示しているわけではありません。エロイズによって象徴される愛の理想と、ルソーが『新エロイズ』の中に込めた愛の理想との間にも、同じだけの歴史的差異が存在することを意味しています。

ここで、その間に登場した文学史上の愛の女性像の中から、「17世紀の古典時代を代表する「クレヴの奥方」の姿、そして、社会風俗が開放的になった18世紀初頭の「マノン・レスコー」の姿を思い出してみましょう。実は、新しいエロイズ、つまりジュリという人物像には、この二人の女性からの影響が強く感じられるだけでなく、クレヴの奥方とも、マノンとも見て取れるような気質が備

わっているのです。

三人の関係を分りやすくイメージするために、各小説の誕生した年を、それぞれ三人が誕生した年と見なしましょう。すると、クレヴの奥方が1678年、マノンが1731年、ジュリが1761年生れということになりますから、生れたときのジュリにとって、マノンは30歳の母、奥方は83歳の曾祖母のような世代関係にあると言えます。このような仮定をもとに、ジュリという女性像に迫ってみたいと思います。

まず、ジュリは曾祖母にあたるクレヴの奥方から、大事な教えを受け継いでいるように見えます。小説『クレヴの奥方』<sup>53</sup>もまた、大変成功した小説です。この中では、夫以外の人を好きになつてしまった奥方が、そのことを夫に正直に告白した結果、夫は悲しみのあまり亡くなってしまいます。当時、読者の最大の関心を集めたのは、この「告白の是非」についてであり、社会的規模の話題となりました。奥方の曾孫にあたるジュリも、この事件のことを聞き知っていたと思われませんが、実はそのジュリにも、全く似たような局面が訪れるのです。

ジュリも夫を持ちながら、別の男性、すなわちサン・ブルーを愛してしまい、夫にこの過ちを告白をしなければという強い気持ちをずっと持っていました。しかし、次の考えが彼女の告白を最後まで引き止めつづけます。

「私が不用意な打ちあけをいたしますと、まったく無益のあの人を苦しめるだけで、私が誠実であることによって得るところは、わたしの胸に残酷にのしかかっている致命的な秘密の重荷から逃れる

だけ、というおそれがあります。告白してしまえば心が楽になるでしょう、きつと。でもあの人は平静でいられなくなるにちがいありません。あの人の安息よりもわたしの安息を優先させるのでは、わたしの非をつぐなうことにはなりませんまい。<sup>54</sup>」

彼女がこのように考えることができたのは、ジュリから見ても曾祖母の代にあたるクレヴの奥方の経験が、教訓としてジュリの中に生きていたからこそでしょう。告白によつては、死に至る悲しみを与えてしまう恐れがあることを知っていたのです。従つて、夫に告白したい真実を胸の内に秘めざるを得ないことによる苦悶や後悔、悲しみ、抗うことのできない感情から生じる良心の呵責、罪悪感に苛まれた点においては、クレヴの奥方と同じような苦しみを味わつたと言えます。しかし、ジュリは飽くまで、奥方のように夫への告白はしなかつたのです。

一方、ジュリには、クレヴの奥方と同じ役割を徹して演じている側面もあります。それは、「何よりも名誉を重んじる」という道徳に従う立場です。ここで言う「名誉」とは、名前、家柄や身分に対する誇りのことで、そうした意味では、ジュリも奥方と同じように、高潔で、英雄的な女性です。このように、二人が持つ気質と道徳が似通っている点については、それぞれの親の考え方や、娘に対する教育の中にも共通点が見られることを指摘できます。

未亡人となり、女手一つで娘を育て上げたクレヴの奥方の母親は、死ぬ間際、危険な恋心を抱いている娘に対して、次のように教諭しています。

「あなたはあぶない懸崖のふちに立っているのです。自分の身を引き止めるのに非常な努力と力とがいられます。夫につくす義務のこ

とを忘れてはいけませんよ。それから自分へのつとめのこともね。私が日ごろあんなに願っていてあなたがやっと今日得ているいい評判を、すっかり失ってしまうのだということをよく考えてね。…（色恋の結果から生まれる）不幸にあなたが会おうときまっていますのだったら、私はそれを見ないで死ぬるのを喜びたいくらいですよ。」<sup>55</sup>

ここで言われている「自分のつとめ」とは、常に生れ持った高貴な身分に相応しい貞操と義務に従うことで、世間体を大事にしていることが明らかです。

ジュリの父親が、娘を惑わすとしてサン・プルーに宛てた警告の手紙にも、貴族の世襲的身分を高らかに掲げる古い秩序がよく表れています。

「覚えておかれるがよい。余はいかなる場合でも、それで事足りると期待しうるならば穏健で紳士的な方法をとることを好む者、よって貴下に対しても丁重に振舞うつもりだが、ただし貴族が貴族ならぬ者から名誉を傷つけられた場合にいかにも復讐すべきかは心得ておりますから、念のため。」<sup>56</sup>

このように、「曾祖母クレヴの奥方」の代から脈々と続いている伝統的精神は、子、孫の代を経て、「曾孫ジュリ」にまで及んでいるのです。

別の角度から見ると、ジュリは母親の代にあたる女性、マノン・レスコーの気質も受け継いでいます。粹で快活、甘く優しく、率直で屈託のない性格です。そのような女性であるジュリは、「母マノン」と同じように、恋する男性サンプルーを自分から誘惑し、さらには彼と肉体関係を結ぶにまで至ります。

しかし、ジュリは結婚を果たして以来、この若気の至りによって罪悪感を感じ、これを悔い改めるために、申し分ない妻としての義務を、生涯全うしようと努め続けたのです。

### 『新エロイズ』の意図

—— “理想的女性像” ジュリ

ジュリを通じて、ルソーが抱いている女性の理想像が明らかになって来ました。明朗快活でチャームिंग、正直で天真爛漫な女性でありながら、なおかつ犠牲的精神も持ち合わせており、何よりも社会的秩序に従順な、市民として守るべき法に則った行動をとることができる女性です。この法とは、繰り返し言うように「名譽」を守ること、言い替えれば「女性は娘として父に、妻として夫に、柔順であれ」というような「社会的秩序」に他なりません。結婚に際するジュリの決心からは、それを明確に読み取ることが出来ます。「天は父たちの善き意図を照らし、子達の柔順に報いたまうのです。」<sup>57</sup>

こうした点からは、ルソーの道徳主義的な匂いが感じられます。また、『新エロイズ』から13年後に書いた『告白』という自伝の中で、ルソー自身は、ジュリの結婚の決断と後の人生における彼女の振舞い方について次のように評しています。「生まれながらに優しく誠実な心を持った若い女性がいて、娘のときには恋の力に負けてしまうが、妻となつては、今度は恋に打ち勝って、再び徳高くなる力を取り戻すならば、この絵巻を全体として破廉恥であり、有益でない主張する人は偽善者である。」<sup>58</sup>このようにルソーは、「風俗や夫婦の貞節といった、社会秩序全体につながる主題」を立て、

この主題に対する彼の理想を、ジュリの性格や決断、行動の中に込めているのです。

続けてルソーは、「公の平和という、もつとひそかな」主題を立てたのだと言い、これについて「少なくともその当時においては、おそらくより大きく、より重要な目的であった」とも付け加えています。<sup>61)</sup> この言葉からは、哲学者としてのルソーの使命感が読み取れます。

哲学者としてのルソーについて知るためには、「啓蒙の時代」と呼ばれる当時の大きな運動の一つであり、彼自身もその編纂に加わっていた『百科全書』<sup>61)</sup> について説明を加えなければなりません。

『百科全書』は、人間のあらゆる知識を統合しようという目論見でしたが、これを巡っては、主に編纂に立ち会っていた哲学者、科学者たちと、カトリック教会との間に激しい対立が起こっていました。『百科全書』が引き起こした闘争に巻き込まれたルソーにとって、両者は「心理の道へと連れ戻しあうキリスト教徒と哲学者というよりは、互いに食い裂きあおうと熱中しあう、狂った狼」のように目に映るのでした。生まれつき「すべての党派精神の敵」であったルソーは、「双方に対して率直に手厳しい心理を語った」のですが、彼らは耳を傾けませんでした。

そこで、次に彼が思いついた手段は、「彼らの偏見を打ち破ることによって、相互の憎悪を和らげ、一方の党派に対しては、公の評価とすべての人間の尊敬に値する、他方の長所と美德とを示すこと」でした。「これは私の単純さから、素晴らしいものと思われた」と彼は言います。<sup>62)</sup> 両者を説得し、啓蒙しようという熱意が『新エロイ

ーズ』には込められていたのです。

こうした意図からヴォルマールとジュリの二人の性格を描いたのですが、前者は哲学者、つまり理性こそ人間を導くべきものであるという無神論的立場であり、後者は理性では制御できない力を認識し、崇める敬虔なキリスト教徒の立場です。ジュリは夫の特徴をこのように描写しています。「ヴォルマールは五十に近い年です。むらのない規則正しい生活と情念の穏やかさゆえに健康な体と生気のある様子を保っていて、みたところやっとなり四十になるかならぬか、経験と知恵だけが年相応に老けております。…彼がなによりも好むことは、観察することです。人々の性格や眼に映る行動を考察することが好きです。深い知恵とこの上なく完全な公正さをもって判断するのです。」<sup>63)</sup> これこそ、啓蒙時代の普遍的な考え方の象徴です。

次の表現にも、ルソー自身が抱いている社会的、政治的理想、哲学者としての理想が表れているようです。「…あの人が自分の家の中にもうけた秩序は彼の魂の奥底に広がっている秩序の反映です、それは世界の統治において打ち立てられる秩序を小さな家庭のうちでまねているように見えます。…いつでも主人の手の働いていることがわかって、それでいてその手が感じられません。彼は最初にとっても巧みに整えましたから今ではすべてがおのずと動いていて、人々は規律と自由を同時に享受しているのです。」<sup>63)</sup> このように、理性主義者、哲学者を象徴する役を演じている夫のことを、それとは対立的な性格を持つはずのジュリの口を借りて語らせ、賞賛させていることは、ルソーが理性を重んずる哲学者の立場をいかに擁護しているかを示しています。

また、次の言葉にも理性主義者ヴォルマールに対するジュリの評

価が表れています。「どの人に対しても同じ態度で……誰かを特に好んだとしてもそれは理性によってそうであるにすぎません。」<sup>64</sup>しかし、このような理性的過ぎる態度が一方では、彼女に物足りなさを感じさせていることが、次の言葉でわかります。「(わたしに対する)情熱もたいそうむらがなく穏やかで、まるで愛することを望む限りにおいてのみ愛する、理性が許すかぎりにおいてのみ愛することを望む、そんなふうなのです。」<sup>65</sup>

ヴォルマールを形容するために、ジュリは何度も理性という言葉を用いなければなりません。それは確かに哲学者たる夫への賞賛の表れなのですが、時として皮肉が込められているのです。たとえ夫であつても、信徒の立場にとつては、理性ばかりの相手に心の底で不満を感じてしまうのでしょうか。

いずれにしても、ルソーはこの二人の夫婦関係を通して、次のことを表現しています。一方では、概念としての「秩序」や「平和」、「理性」などの本質がいかなるものであるかを示し、その重要さを伝えていきます。哲学者が示してくれるこれらの道しるべを基準としてこそ、人間は正しき道を歩むことが出来ると言うのです。もう一方では、神を信ずるものにとつては理性の力だけで歩むことは困難であり、理性では抑えきれない力が存在することを認めています。しかしながら、信徒であつてもそのような力、すなわち神の力を借りることによつて、哲学者の説く理性的な社会秩序に従つて歩むことが出来るということを示しているのです。

## ルソーの誤算

しかしながら、こういったルソーの主張に対して、彼を「反動分子」として批判する声も数多くありました。つまり、伝統的な貴族のルールや、女性の立場に関する「娘は父親に従順であれ」といったような、古くからの確固とした秩序に従うことを良しとする彼の態度が、いささか時代に逆行するとして、当時の進歩派から批判されたのです。確かに、理性にもとづく普遍的秩序があるという立場は、18世紀における思想の基本をなすものです。しかし、時代はすでに、フランス革命前夜に差し掛かっていたので、誰もが理性に従い正しき道を歩めるのだという彼の思想は、保守的であるとの批判を免れなかつたのです。では、保守派から好意的に見られたのかと言えば、それも違いました。それどころか、理性のために神の力をかりるとするのは、無神論的哲学者、理性主義者達にとつてはもつてのほかだつたのです。

また、ルソーが自然賞賛の裏側で、文明に対する厳しい批判を行ったことも、進歩派の批判を買いました。最初から確執のあつた文明賛美者のヴォルテールは、ルソーのことを、哲学者としてだけではなく、個人としても全くの孤独者であると言ひ放ちます。それどころかルソーは、同じく進歩派ですが、長年の親友であつたディドロにまで批判されてしまいます。君がそのような誤算をしてしまつたのは、君の考えが意地悪く、下らないものであるからではないかと。

## ルソーの二面性

## ——主張する主体、渴望する主体

しかし、こうした事実とは反対に、ルソーの『新エロイーズ』が文学史上、少なくとも1世紀以上に渡って強い影響力を持ち続け、輝かしい足跡を残した小説であるという事実が、一層揺るぎないものであるのは、一体何故なのでしょう。この成功の理由をひも解くためには、再び小説の登場人物の誕生に戻る必要があります。実は、中でも、重要な鍵を握っているのは、サン・ブルーです。実は、彼の中に作家ルソー自身が投影されているという、小説だけを読んでも見えてこない仕組みが隠されているのです。

そこで、ルソーの『告白』を再び見てみましょう。彼は、人生において経験できなかったものを妄想において経験したかったと、この中で語っています。それは、生涯でたった一度、たった一つしかない愛を体験し、知ることです。それさえ成し遂げられたら他には何もいらぬという程の、最上の幸福、最大の目的であります。しかし、彼はそれまでの人生で未だそれを体験していないと感じていたのです。そこで、待ちわびていた幸福が訪れないならば、せめて自分で作り上げ、疑似体験しようというわけです。

作家であり哲学者でもあるルソーが、道徳主義者としての主張を小説の中に盛り込んでいたことは、これまで見てきた通りですが、そのようにして外側に何かを発信しようとする意図があったもう一方で、これとは別の「渴望」、作家自身が「要求したもの」が、心の内側へと向けられているのです。従って、外に向うルソーと、内に向うルソーが存在することは、単なる解釈ではないのです。彼の中

には、「道徳主義者」と、「ありのままの人間」という二人が存在しています。

『対話、ルソー、ジャン・ジャックを裁く』（1772—76執筆）という著作のタイトルからもそれがはっきりと分かります。「ルソー」とは、彼の内面に一貫して存在する道徳主義者であり、「ジャン・ジャック」とは、愛し、愛される体験をしたいという切なる希望を胸に抱き、おののいているもう一人の「私」自身に他なりません。このような観点を新たに加え、再び小説に光を当ててみましょう。

## 愛の犠牲者サン・ブルー

ジュリがヴォルマールと結婚して以来、サン・ブルーは遠慮して身を引いています。サン・ブルーはジュリの結婚を尊重しています。もつと言えば、彼女の決断、彼女が結婚の道を選んだという点こそが、彼女が彼女を尊敬する最もたる理由です。その結果、サン・ブルーは愛のために、自ら犠牲者となります。ジュリの気持ちや立場、彼女の全ての平穏を守るために、彼女の前から姿を消して、耐え忍ぶことこそ、サン・ブルーの、ジュリに対する愛の証だったので

す。

これはエロイーズの恋人であったアベラールと同じ立場です。事情は異なりますが、アベラールも彼女の前で不在でありつづけた。それでも愛の対象は失われず、二人の愛の障害とはなりません

でした。

しかし、相手を尊重して身を引いたサン・ブルーですが、そうし



た態度の内にも、心の底ではある種の期待を抱いているのです。『新エロイーズ』の目には見えない仕組みは、ある「報酬」への期待がサン・プルーの内にとつと秘められていることです。ジュリの最後の手紙による告白、これによつて、知らぬ間にずつと待ち望んでいた報酬が、彼にもたらされるのです。読者から見れば、サン・プルーにとつての思い掛けない報酬に見えるかもしれませんが、「ジャンジャック」がずつと待っていたものだったのではないでしょう。サン・プルーはそんな素振りもちつとも見せませんが、作家本人は彼の仮面をかりてずつとこの告白を期待していたのです。

### ジュリの”告白“——愛の叫び

この観点からジュリの最後の手紙を見てみましょう。

ジュリは死に際に、それまで打ち明けられなかつた胸の内の本心を告白することによつて解放されます。しかしこの「解放」というのは、クレージュの奥方のような、罪悪感からの解放ではありません。籠の中に閉じこめられていた小鳥が放たれるように、ずつと外に出たがっていた愛が解放されたのであり、彼女の誠実で率直な感情の発露としての告白なのです。それを閉じ込めていたことによる罪悪感から逃れるために鍵を開け、檻を空にしたのでは決してないのです。

大事なことは、この告白が死に際してなされたこと、つまり、敬虔な信徒であるジュリにとつては、神の御前に立たされて発した言葉であったことです。神に捧げられた言葉は、真実の結晶とも言えるでしょう。それを考えると、彼女の告白がいかに正直なものであ

つたかという以上に、告白というよりはむしろ、愛の叫び声であったことがわかります。

この何世代ものフランス人読者の耳に響き渡ってきた叫びに耳を傾けながら、告白の手紙を読むと、理性では抑えられない力が確かにあることを、読者は感ぜずにはいられません。そして誰もが、その不思議な力を、「愛そのもの」と名付けることでしょう。これはまさしく、聖書に説かれた愛と通じるものです。「信仰と希望と愛」、聖パウロが言う通り、最後に残るこれらのものは、ジュリの最後の瞬間の告白に表れています。最後に残ったものが愛そのものであり、それが最も大いなるものであることを知るのです。ジュリの最後の手紙は、この叫び声が小説全体を照らし返し、鳴り響いてることを読者に思い起こさせます。そして、ジュリの結婚生活の全てにそれが及んでいることを見て、彼女の心もまた、犠牲となつていたことに気付かされるのです。この長い間の忍耐は、そのまま犠牲の重さを示しており、同時に、愛の重さ、愛の力の強さを示しているのです。

それでもジュリは、クレージュの奥方のように、死ぬまで誇り高く、堂々としていました。しかも奥方のように、達観したような境地における受け身の死ではなく、溺れる我が子を救うため死をも恐れなかつた積極的な態度は、聖書が示すもう一つの愛の形です。そういう面でもジュリは、まさに敬虔な信徒といえます。ルソーが示した「愛そのもの」にはこうした自己犠牲の精神も含まれているのです。小説では目立ちませんが、サン・プルーも密かに同じ犠牲を払つていました。ジュリの結婚を容認し、彼女への感情を犠牲にしただけでなく、自分自身は一生結婚しないとさえ誓っていたのです。

彼を気づかしたジュリが、未亡人となったクレールとの結婚の話を持ち掛けますが、それさえも彼は断ります。結局は、二人の結びつきは、互いが愛そのものを守るために自分自身を犠牲にすることによって成り立っていたのです。つまり、二人は離れていても、同じ世界を生きていたと言えるのです。

### 愛の真実は危険な“深淵”か

ここでまた、ルソーに対する批判の声があがります。彼の示したプラトニックな愛の形は時代錯誤だとして、ヴォルテールをはじめとするエピクロス的立場から批判されたのです。どうして享樂的時代になったのに、このような反動的なものが受け入れられたのかという疑問が再び立ち現れてきました。

その答えは、小説を通して表現された「真実的的確さ」にあると言うべきでしょう。『新エロイズ』が成功を見たのは、そこに表現された真実が、どの読者にも共鳴する的確さを持って、鳴り響くからなのです。

例えば、アベ・プレヴォーの『マノン・レスコー』と比較してみましょう。この中で、プレヴォーがマノンを通して示している「矛盾」は、デ・グリユーの口を借りて語られています。「『なんの因果で、こんな罪づくりになったのだろう！』と、私は自分に言ってみて、『恋愛はけがれない情熱であるはずなのに、ほくにとつて、どうしてそれが不幸とふしだらの原因になってしまったのだろう？』」愛そのものは純粹なのに、感覚的にはふしだらへと導き、

社会的には裏切りや、殺人、偽りの誓いを招いてしまうというのが、小説を通して伝えられている「矛盾」です。マノンを失わないため、迷わず彼女の取り決めに従うデ・グリユーは、献身的で、公平な精神をもった騎士に違いありません。しかし、そんな彼を導いたマノンには、移り気で軽薄な女性として描かれ、女性が全ての過ちを起こす原因、諸悪の根源であるかのように語られているのです。

実際、マノンはそのような女性だったのかもしれませんが、仮にプレヴォーが正しいとしても、少なくとも一つ不公平な部分があることに気が付きます。マノンが婦らぬ人になってしまった後に、デ・グリユーによって彼女の思い出が語られるところから小説が始まるという、構造そのものです。マノン自身は、もはや自ら語ることはできません。マノン自身の口から事実の告発、自分を弁護するような言葉をもはや聞くことができないからです。こうした小説の構造は彼が考え、後に頻繁に真似られました。結局マノンがどんな人だったのかも、全ては女性が悪いのか、本当の意味では誰にも分からないのです。

マノンに代わって、ルソーはジュリを登場させます。ジュリは生きて語る人物です。彼女自身が自分の心の動きを表現し、矛盾や葛藤なども含めた全ての率直な心情を語ります。マノンと決定的に異なる部分は、女性に主体性が与えられているという点です。仮にジュリを、主観的立場を与えられて甦ったマノンの生まれ変わりとしてみなし、この「新マノン」に、デ・グリユーと再び語り合ってもらうことにしましょう。

デ・グリユーは言います。「人が、なんらの抵抗もせず、なんら

の後悔も感ぜずに、自分の本分から一挙に遠くさらわれてしまうのは、いったい、これはどんなに忌わしい力によるものなのか、これは誰かに説明してもらいたいものである。」新マノンもこの忌わしい力を恐れ、嘆きます。「ああ、最初の乱れはつらく緩やかなのに、その後はすべてでなんと速やかで容易なのでしょう！情火の魔力よ！このようにしておまえは理性を惑わし、知恵を欺き、人がそれと気付かぬうちに本性を変えてしまうのだ。」

デ・グリユーがさらに言います。「不幸が一瞬にして、わたしを再び谷底に突き落としたのである。そして、わたしのこの墮落はもはや取り返しのつかないものになってしまった。というのは、わたしがい出ししてきたものとの深間にたちまち落ち込んだというばかりではなく、新たに重ねた放埒な行為は、深淵の奥底のほうへいよいよ深く私をひきずりこんでいくからだった。」新マノンも口を揃えて答えます。「生涯のただ一瞬の迷いにおち、正しい道からただの一步踏みはずすと、たちまち避けられない傾斜がわたしたちを引きずり、破滅させます。ついに深淵に落ち、そして徳のために生れた心をもちながら、罪におおわれたわが身を知り慄然として目覚めるのです。」

このように「新」マノンもデグリユーも全く同じ経験をしていたことがわかります。二人を「深淵」へと導いたのは、相手の男性でも、女性でもありません。愛を持つ「忌わしい力」、「情火の魔力」だったのです。こうした力が社会の秩序にとって危険であることは、古くから哲学者をはじめ、あらゆる指導者たちが指摘しており、その力に屈しないように抵抗しなければならぬと、説き続けてきました。もし抵抗しなければ、深淵に落ちたが最後、この力の奴隷に

なってしまうからです。この教えは元々宗教から来ており、愛そのものの奴隷ということではなく、愛が導いた「悪の奴隷」になってしまうことを意味しているのです。

男女に関わらず、誰にでもこのような恐れがあるという、有史以来言われ続けてきた真実を目の当たりにした点で、主人公たちは共鳴しており、小説がそうした真実を的確に言い当てているからこそ、読者も共鳴することができたのです。

最初のロマンティズムと言われる英国のリチャードソンや、彼に先立ちロマンティズムの流れを生み出したアベ・プレヴォー、同じくプレ・ロマンティズムの流れを汲むルソー、彼等に共通している点は、その強力な力が「一瞬」にして作用することです。男女が一目会って恋に落ちてしまう、この不思議な力は、中世の魔法のように機能しています。まるで目と目の間に閃光が生じたかのようなその刹那に、二人はそれまでとは異なる世界に取り囲まれてしまいます。その中では、もはや互いの事しか目に映らなくなり、社会的義務や本分が全て取り払われてしまうのです。世間はそれを許さないため、外部との関係に乱れが生じますが、これを境に本人達の心の内にも乱れが生じるのです。罪悪感の誕生、葛藤のはじまりです。

### 逆説の道徳主義者ルソー

ジュリはそのことをあらかじめ知っていました。彼女の道徳は17世紀、クレーヴの奥方のそれを受け継いだものだからです。だから彼女は、不思議な力に対して抵抗し続けました。しかし、必死

の抵抗も空しく、彼女は精神的にも肉体的にも不安定なままでした。罪悪感を消し去ることも、良心の痛みを和らげることも、肉体的な充足感を得ることも出来なかったのです。次の引用には、その葛藤のすべてが凝縮されており、「心の乱れ」の原因が表れています。「わたしたちはお互いのためにつくられている。人間の秩序が自然の関係をかき乱さなかったら、わたしはあの人のものになっただろうに、そしてもし幸福であるということが誰かに許されているならば、わたしたちこそ一緒にそうなたにちがいないのに。」<sup>73</sup>

このことは逆説的です。何故ならジュリがずっと守ろうとしてきたものは「人間の秩序」すなわち「社会の秩序」であり、それによって幸福は成し遂げられるはずでした。しかし、愛の力を理性によって抑え続けてきたことは、彼女を幸福にするどころか、かえって彼女を不幸にしています。しかもその力は、抑え切れないというばかりか、人間の秩序、社会の秩序を守ろうとする総ての力に勝るといえるのですから、これは小説全体を通してルソーが打ち立ててきたものの全てを無効にするような結末です。理性の鎖は打ち砕かれ、彼が一生懸命打ち立てようとしてきた道徳は、結末において逆転してしまいます。それは、どのような障壁があっても、愛そのものが、粘り強く困難を乗り越えてゆくことを示しています。この力は社会の偏見、社会的階級の拘束力よりも強く、義理や名誉を守ろうとする力よりも強く、意志よりも強いのです。小説の終盤、告白によって表れてくる愛は、そのような様相を呈しています。

愛の力の前に理性が屈してしまった今となっては、ジュリが貫いてきたものの全ては偽りに過ぎなかったということなのか、と言えばそれもまた違います。彼女が理性に従い徳高く生きようとしたこ

とや、夫との幸福を理想に掲げて目指してきたこともまた、疑いの無い真実なのです。だからこそ、ジュリを見守ってきた読者は、彼女の死を迎えて大きな矛盾の前に立たされるのです。<sup>75</sup>

### 革命的な徳——善良な自然

ルソーはこの逆説的結末によって浮き彫りになった矛盾に、ただ真実味を与えたという事に留まりません。ジュリの「愛の叫び」に、新しい美徳を与えているのです。彼女の叫びは、それまで犠牲にされていたジュリの中の「自然」の覚醒であり、「ありのままのジュリ」の叫びとも言えます。

18世紀の人々は、大航海時代を経て発見した「善良な未開人」を好んでいました。そこには、異国情緒、遙かなるもの、未知の味や匂いを感じる不思議なものへの憧れがあります。禁じられ、掴むことが出来ないようなものが魅力を放つように、自然に生きる未開人もまた、人を引き付けます。彼等には、高度に社会化される以前の人間が持っている「自然」が残されているのです。

ルソーも自然を愛していたことは既に見ました。しかし大切なのは、彼がただ、詩人として自然を愛しているというだけに留まらず、彼と自然との関係の奥底には、哲学的な「善」の思想が横たわっていることなのです。彼の哲学の根本を取って簡単に説明するならば、自分自身が自然と同じ本質を持つことを認めている人間にとつて、罪は存在し得ないという考え方です。<sup>76</sup> 未開人として自己同一化した人間に罪がないのであれば、悪も生じるはずがありません。従って「未開人」は哲学者ルソーのアイデンティティーでもあるのです。

善良なる自然——これがジュリの愛の叫び、理性を超えた愛の力に正当性を与え、徳として復権させたのです。

ありのままの人間が持つ情熱を認め、それに価値を付与するということは、社会という集団よりも、個人を尊重し、自我を礼賛することに繋がります。そうした意味でルソーが示した新しい徳は「革命的」な徳とも言えるのです。これに基づいて行動する限り、人間は善の道を歩むことが出来る、たとえ社会の法には外れることがあつたとしても、心の法に従う行いに悪は生じない、というわけです。<sup>77</sup>

### 仮面を脱いだ主体 “ジャン・ジャック”

この新しい道徳は、ジュリをはじめとする全ての登場人物はおろか、本来「作家ルソー」自身が貫いてきた道徳さえ覆すものです。言い換えるなら、古き伝統的精神に連なる恋愛観、つまり『クレヴの奥方』の登場人物や、古代ギリシャ人の仮面劇を真似たコルネイユ古典演劇に見られる「自尊心」や「名誉」という名の徳と、全く矛盾します。だから、最後まで父や夫に忠実な女性として振る舞い続けたジュリは、言わば「名誉」という「仮面」を被っていたということになります。しかし、最後にこの仮面ははがれ落ちるのである。仮面の下から表れてくる女性像は「生涯の愛」の象徴であるエロイズそっくりです。ルソー自身もまた、小説の全体を貫いて「理性主義的哲学者ルソー」の仮面を被っていたことになりました。最後のジュリの手紙によってこの仮面も取り払われ、下にはこのエロイズを愛し、彼女に愛されることを切望するジャン・ジャックが現れてきます。<sup>78</sup>

ここに再び、小説に隠されていた目には見えない詩的な仕組みが露になりました。それは、作家と言えども、その裏側にはただの人間としての主体があり、「ありのままの主体」としての作家が、あたかも自分に起こったことかのように小説を綴り、同時にそれを体験する、という仕組みです。その体験が主体の喜びであり、作家本人が作品に対して期待していることによって、作品の機構が決まるのです。

「作家ルソー」の奥にある、ありのままの主体「ジャン・ジャック」は、何を期待し、求めていたのでしょうか。それは、エロイズと呼ぶべきジュリを愛することだけではなく、同時に愛されることだったのです。もつと言えば、その証も求めています。ジュリは、「告白」と「自己犠牲」という二つの証を、彼に与えています。ただの言葉による告白ではなく、言葉を越えた愛を叫びながら、全ての意志と、身体と魂をかけて、神にも届く声で証を立てます。それはサン・ブルーへの愛の証明です。ジャン・ジャックはそれほどの証を求めていたのです。ジュリと呼ばれた女性からの愛の叫びを聞くこと、仮に自らそれを作り出さなければならなかったとしても、彼はそれを体験したかったのです。作家の内なる主体が求めて描いた、理想的過ぎる程の人物像、誰もがそのような理想像を求めているということが普遍的であるとすれば、読者の理想と彼の理想とが重なったところに、この小説の成功があつたのかもしれない。

謝辞 本稿の日本語校正、脚注作成等に、本学大学院生の梁川健哲氏に御協力頂きましたことをこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

- 注
- 1 Louis14 (1638-1715) 1661より政務を親裁。絶対王政の最盛期をなす。
- 2 Louis15 (1715-1774) 14世の曾孫。1715より即位。
- 3 Abbé Prévost (1697-1763)
- 4 『マン・ヌベロー』 (*Manon Lescaut* 1731)
- 5 Denis Diderot (1713-1784)
- 6 1751からマニョット・ダランベールらによって編纂された。
- 7 Marie Antoinette (1755-1793)
- 8 Voltaire (1694-1778)
- 9 Du Contrat social, ou principes du droit politique (1762)
- 10 Emile ou l'Éducation (1762)
- 11 Profession de foi du Vicaire savoyard (1762)
- 12 Discours sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes (1753)
- 13 Essai sur l'origine des langues (執筆年代不明)
- 14 Confessions (1765-1770)
- 15 Les Rêveries du promeneur solitaire (1782)
- 16 Samuel Richardson (1689-1761) 『パメラ』 (*Pamela ou La Vertu récompensée*) 海老池俊治訳、「世界文学大系76」、筑摩書房、1966.6
- 17 Thérèse Levasseur
- 18 Friedrich Melchior von Grimm (1722-1807)
- 19 「エミール」「社会契約論」も同時に執筆していた。当時44歳。
- 20 中略部分「生まれつき外にあふれ出る魂を持ち、生きることが愛することであるという私が、まったく私のためになってくれる友人、真の友人を、この時まで持たず、しかも自分は真の友人となるために生れたと感じているとは、どういふことであろうか。」ルソー「告白」、『ルソー全集 第二巻』、白水社、p.38
- 21 ルソー「告白」、『ルソー全集 第一巻』、白水社、p.262
- 22 ルソー「告白」、『ルソー全集 第二巻』、白水社、p.40
- 23 同上、
- 24 ナイチンゲール、夜鳴きウグイスのこと。
- 25 ルソー「告白」、『ルソー全集 第二巻』、白水社、p.39
- 26 同上、p.43
- 27 同上、p.43-44
- 28 ルソー「新エロイズ」、『ルソー全集 第九巻』、白水社、p.18-19
- 29 同上、p.22-23
- 30 同上、p.26
- 31 同上、
- 32 同上、
- 33 同上、p.27
- 34 内に秘め続けていた感情が爆発するわけですが、このような死をも臭わせる激しい感情の発露が、物語の最初の方からおとずれるあたりは、ラシーヌなどの古典演劇を思わせるものです。
- 35 ルソー「新エロイズ」、『ルソー全集 第九巻』、白水社、p.27
- 36 同上、p.27-28
- 37 名誉を重んずる点では「クレヴの奥方」と似ていますが、ルソーが表現しなかったのは、17世紀の登場人物が持つ、立場や身分から生じた高慢とも言える自尊心ではなく、むしろ善や徳を重んじるが故の自尊心なのです。
- 38 ルソー「新エロイズ」、『ルソー全集 第九巻』、白水社、p.30

- 39 同上、p.59-60
- 40 同上、
- 41 同上、p.60. ルソーとは正反対の性格・思想をもつ同時代の哲学者ボルテールは、このような形容の仕方を大げさとし、これを読んで大笑いしたという。
- 42 ルソー「新エロイーズ」、『ルソー全集 第九巻』、白水社、p.97
- 43 同上、p.187 (第一巻——手紙62クレールよりジュリへ) ここでジュリの父がサン・ブルーを拒絶する理由は社会的偏見にもとづくもので、ルソーがよく論じた人間の不平等が露になっています。
- 44 同上、p.353
- 45 同上、p.413
- 46 同上、p.417-418
- 47 このように、ルソーは、自分を投影した登場人物でもあるサン・ブルーがジュリと夫との三人で暮らすという形をとって、現実世界で叶わなかったドウドト夫人とサン・ランベールとの関係を、小説において実現させているのです。この点についてもよく論じられています。ルソーはドウドト夫人とその愛人との共同生活を実現できなかったために、その願望をサン・ブルーに託し、ジュリとその夫ヴォルマルとの共同生活を実現させようとした、というのが『新エロイーズ』の構想に関する通説でした。しかし最近では、ルソーは最初から、小説の構想の全体像、つまり、ジュリとの恋、別離、その間の彼女の結婚、そして、夫人となった彼女と再開し、彼女と夫とサン・ブルーの三人が共に暮らすようになる、という成り行きをすべて思い描いていた、というのが有力な説です。この場合は、ドウドト夫人と、その愛人との三人の共同生活を営みたいというルソーの願望は、既に小説の構想の中で仮定していた状況が、その
- 48 ルソー「新エロイーズ」、『ルソー全集 第十巻』、白水社、p.44
- 49 同上、p.445. このようなルソーの考え方は最高の徳と見なされましたが、全てを明るく見るとにさらすことが、必ずしもよいとは限らないという反対論も招きました。刑務所の一室監視台に対する批判は、その一つです。
- 50 同上、p.436
- 51 同上、p.427
- 52 Charles Augustin de Sainte-Beuve (1804-1869)
- 53 『クレヴの奥方』(La Princesse de Clèves 1678)
- 54 ルソー「新エロイーズ」、『ルソー全集 第九巻』、白水社、p.440
- 55 ラファイエット夫人 (Madame de Lafayette) 『クレヴの奥方』(La Princesse de Clèves) 青柳瑞穂訳、新潮文庫、1987、p.58
- 56 ルソー「新エロイーズ」、『ルソー全集 第九巻』、白水社、p.379
- 57 同上、p.438
- 58 ルソー「告白」、『ルソー全集 第二巻』、白水社、p.48. 小説の構想が現実に先立つと考える近代評論家は、ルソーが最初から物語の全体像を描いていたのだとする根拠を、この言葉に見い出している。
- 59 同上、p.48-49
- 60 同上、
- 61 『1761-72年フランスでデイドロ、ダランベールらの監修のもとに刊行された大百科全書。啓蒙思想ないし自然科学・産業技術の普及、特にフランス革命の思想的準備に大きな役割を果たし、その後の百科全書の手本ともなった。
- 62 ルソー「告白」、『ルソー全集 第二巻』、白水社、p.48-49

- 63 ルソー「新エロイズ」、『ルソー全集 第九卷』、白水社、p.434-435
- 64 同上 p.434
- 65 同上 p.435
- 66 「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」聖パウロ 新約聖書「コリントの信徒への手紙——13.愛——13
- 67 アベ・プレヴォ (Abbe Prévost) 『マノン・レスコー』 (Manon Lescaut) 河盛好蔵訳、岩波書店、1957.p.45 - 46
- 68 同上、
- 69 ルソー「新エロイズ」、『ルソー全集 第九卷』、白水社、p.413
- 70 アベ・プレヴォ (Abbe Prévost) 『マノン・レスコー』 (Manon Lescaut) 河盛好蔵訳、岩波書店、1957.p.46
- 71 ルソー「新エロイズ」、『ルソー全集 第九卷』、白水社、p.413
- 72 Samuel Richardson (1689-1761)
- 73 ルソー「新エロイズ」、『ルソー全集 第九卷』、白水社、p.398
- 74 この上記の引用で言われている言葉を、文脈から「人間（じんかん）の秩序」と読めば、「自然の秩序」と対立する意味合いの言葉として、より理解しやすくなると思われまます。
- 75 意志と言動のすべては、常に信仰に基づく格率に従い、思い描く理想のもとに一つでなければならぬ、というキリスト教徒の行動原理がジュリの中にあるはずであるからこそ、「矛盾」といえるのです。
- 76 ここに、ルソー自身が持つキリスト教文化の習慣、或は道徳主義者としての伝統が表れています。それは、物事を善と悪に明瞭分け、どちらかに割り当てることであり、これこそまた「矛盾」を生む原因の一つです。
- 77 「善良な自然たる各個人に悪は無い」これは裏を返せば、「悪を生じさせるのは社会・文明である」ということになります。ルソーは古い道徳に最大の敬意を払いつつも、この主張を含ませているのです。
- 78 仮面というのは、客体であること、つまり見られる対象であることを意識しているからこそ存在するものです。この客体の意識がもはや消え、主体の本質が透明になった仮面の上に浮かび上がる、或は主体と仮面とが一体化した状態といっても良いでしょう。